

平成 28 年 9 月

御宿町議会議長 大地 達夫 様

第 4 次御宿町総合計画及び御宿町議会改革調査特別委員会
委員長 石井 芳清

第 4 次御宿町総合計画及び御宿町議会改革調査特別委員会において調査、研究した結果を以下のとおり報告する。

1. 調査・研究結果

御宿町の発展を支えてきた「観光」を町の総合的発展の軸として捉え、本町の観光振興の方向性を明確にする御宿町観光ビジョン（仮称）の策定と観光ビジョンの第 4 次御宿町総合計画後期基本計画への反映を町へ提言する。

2. 観光ビジョン（仮称）策定の目的

まちづくりの根幹を成す観光振興の方向性を明確化し、中長期の目標を掲げ、町と観光関連団体・町民が共通の理念のもと、計画的な事業展開を行うための指針とする（第 4 次御宿町総合計画後期基本計画への反映）。

観光施策の総合体系の明確化により戦略効果の向上を図る。

3. これまでの協議内容

各委員が共通認識をもつため、第 1 回及び第 2 回の委員会では、第 4 次御宿町総合計画の基本的考え方や前期基本計画の進捗、後期基本計画策定スケジュールなどについて企画財政課から説明を受け、平成 28 年度当初予算と基本計画の整合性等について整理を行った。

第 3 回委員会以降は、今後基本計画に提言をする項目について協議を行ったところであるが、町の人口減少に歯止めを掛ける定住化の促進、子育て環境の改善には、雇用の確保が必要であり、そのためには基幹産業の活性化が不可欠である。更に町の基幹産業においては、観光に支えられている部分が多い。これまで様々な施策が展開されてはいるが、平成 19 年 3 月に御宿活性化委員会が報告した「おんじゅくウェルネス計画」の中で整理されている町が直面している課題は（資料 1）、現在の課題としてもそのまま置き換えることができ、観光の振興が喫緊の課題であると確認がされた。

以上のことから、当委員会から、第 4 次御宿町総合計画の推進を図るため、

観光分野から町の活性化を図る指針となる御宿町観光ビジョン（仮称）の策定を要望することとして意見をまとめ、第6回委員会において、工学院大学下田教授を参考人として招き、提言案への参考意見をいただいた。

参考意見の要旨は次に記載するが、町観光ビジョンの策定については肯定的な意見であった。ただし、具体的な施策の展開する段階においては、町の海浜部の自然環境などの重要性を十分理解した上で、御宿町を訪れる者が、何を求めているのかを十分検証、検討し、実現することが重要であるとの意見を頂いた。

※調査・研究内容に関する参考人からの意見

(1) 意見聴取を行った委員会の開催日

平成28年7月20日（水）

(2) 参考人

工学院大学建築学部まちづくり学科下田教授

(3) 参考人の意見要旨

町では、街中、内陸、海岸を万遍なく均等に、バランスよく発展させるということを考えていると思うが、御宿町の場合軸足は海にあると思う。

東京から見ると、外房地域には自然豊かな海があるということ想像するが、実際には、砂浜に海浜植生がある海岸は非常に少ない。御宿町には、非常にきれいな松林と海浜植生がかろうじて残っているところを是非理解していただき、都市住民から見た海浜部の魅力とは何かというところを考えていただいて、今後、施策の展開していただければと思う。

観光によるまちづくりを進めるにあたり、自然と安全とのバランスが課題となるが、バランスをとるということは、そこに住む方の都合で、観光客はそういうことは考えない。安全を確保するために防波堤等を建設すると海岸での楽しさは感じられなくなる。厳しい言い方になるが、観光を重視するのであれば、多額の資金を投じて防潮堤、防波堤を造り、観光資源をないがしろにするよりも、きちんとした避難計画をたてることが望ましいと思う。観光と安全の両立は難しいと考える。

参考人の意見提言についての詳細は資料2にて報告

4. 観光振興に関する課題

- ・海岸の環境保全とリゾート地に相応しい景観づくり
- ・アワビの増殖による観光振興の方向性の明確化
- ・観光拠点としての月の沙漠記念館のリノベーション

- ・観光と基幹産業の連携体制の強化
- ・里山環境を活かした観光施策の展開
- ・民間資本の活用
- ・ビジョン策定にあたっては、旅行業界、景観・環境についての識見者、情報発信の専門家など多様な意見を参考にしながら、御宿町の観光振興のあるべき姿を住民・関係団体との協働により進めることが不可欠である。

5. 調査・研究のまとめ

平成25年3月策定の第4次御宿町総合計画においては、税収や人口の減少、少子高齢化等により財政状況が厳しさを増す中、「笑顔と夢が膨らむまち」の実現を目指すための指針が示されている。

この総合計画には、「住民が希望を持ち、住んでよかったと思う特色あるまちづくり」を進めるためのちからのひとつとして「魅せる観光のちから」があげられており、同様に他の各産業との連携により、町全体の産業の活性化を図ることも併せて示されている。

また、観光の活性化は産業面に留まらず、自然との共生や文化の継承・創造、あるいはスポーツ振興、生涯学習や児童教育の充実、定住促進など波及効果が高い。

このようなことから、青い海、美しい海岸線や里山、アワビ・伊勢えびをはじめとする高級食材、童謡「月の沙漠」や人命救助に係る歴史や文化など、町の財産を活かした観光施策が進められている。

しかし、日本が成熟社会に入り、国際化が進んでいるもとの観光のあり方が変貌し、また海水浴離れが進んでいることなどから町の観光客は減少しており、これまで行ってきた単発のイベント実施はもとより、総合的に観光行政を見直さなければならないことは、明確となっている。第4次御宿町総合計画前期基本計画においても同様の課題は整理されているが、観光行政のみからの視点であり、観光振興でのまちづくりについては記述されていない。

国においても、「観光先進国」を目指し、観光庁が設置され多様な観光施策を展開しており、地方創生を進める一環としても観光を捉えているところである。

当町における観光は、前述のとおり多くの産業、またまちづくりの基礎的部分を支える役割を担っており、国等の施策と歩調を合わせつつ、将来像を見据えた町独自の新たな観光戦略が求められている。

以上のことから、町総合計画が目指す「笑顔と夢が膨らむまち」を実現するためには、改めてゼロベースから住民とともに、町観光の進むべき姿を示す観光ビジョン（仮称）の策定が急務である。